

ビザンツ帝国の戦争

—— 戦術書と捕虜交換 ——

井 上 浩 一

はじめに

東洋と西洋のあいだ、文明の十字路に位置したビザンツ帝国は、周辺の諸民族・国家との戦争を繰り返した。ビザンツ帝国の歴史は戦争の歴史と言ってもよい。しかしふり返って見ると、378年、東のローマ皇帝ヴァレンスが西ゴート軍に敗死したアドリアノーブルの戦いから、1453年のコンスタンティノーブル陥落まで、大部分は敗北の歴史である。636年のヤルムークの戦いや、1071年のマンツィケルトの戦いのような世界史的敗北も経験している。一千年の歴史のなかでビザンツ軍がめざましい戦果を挙げたのは、6世紀ユスティニアヌス時代のごく一時期と、920年代にブルガリア軍のコンスタンティノーブル包囲を撃退してから、11世紀の初めにそのブルガリアを併合するまでの100年ほどに限られる。しかも弱いだけではなく、戦闘意欲も疑わしく、十字軍など同時代の西欧人から「軟弱」「臆病」「卑怯」といった非難を浴びせられてきた。

しかしながら、敗戦を繰り返しつつビザンツ帝国は一千年にわたって存続した。連戦連勝を誇ったアレクサンドロス大王やチンギス・ハーンの大帝国が、あっけなく崩壊したり、100年あまりで滅亡したことを思えば、ビザンツ帝国の戦いぶりは興味深いテーマであろう。事実、ビザンツの戦争に関する研究は20世紀の末から活発になっている¹。ジハードのような聖戦観念と対比しつつ、ビザンツ人が戦争をどのように理解していたのかということも検討されるようになった。その背景には、湾岸戦争・アフガン戦争・イラク戦争と、イスラーム絡みの戦争が続いたことに加えて、現代的な「戦争と平和」の問題意識もあるように思われる。たとえば1995年に刊行された論文集『ビザンツにおける平和と戦争』は、序論において広島・長崎に触れている²。

ビザンツ帝国の戦争・戦争観への関心をさらに高めたのは、2006年の9月にローマ教皇ベネディクト16世が母校のレーゲンスブルク大学で行なった講演『信仰・理性・大学——回顧と考察』であろう。教皇は、ビザンツ皇帝マヌエル2世（在位1391～

1425年)の言葉を引用した。

「ムハンマドが新しいこととしてもたらしたものをわたしに示してください。あなたはそこに悪と非人間性しか見いだすことができません。たとえば、ムハンマドが、自分の説いた信仰を剣によって広めよと命じたことです。」³

教皇の発言は各国の新聞・雑誌で取り上げられ、イスラームのテロを非難したと紹介された。イスラーム世界からは強い反発もあったが、ビザンツ人の戦争観という点でとくに注目したいのは、続けて引用されたマヌエル2世の次のような言葉である。

「神は血を喜びませんし、理性に従う(シュン・ロゴイ)ことなしに行動することは神の本性に反します。信仰は魂から生まれるものであって、肉体から生まれるものではありません。誰かを信仰に導きたいなら、必要とされるのは、上手に語り、正しく考える能力であって、暴力や脅しではありません。……理性を備えた魂を説得するために、腕力も、いかなる武器も、死をもって人を脅すその他の手段も必要ではありません。……」⁴

帝国最末期の皇帝マヌエル2世の言葉は、ビザンツ一千年の戦争史を顧みることによって、その重みが理解できるであろう。本稿は、軟弱と言われ、敗北を繰り返したビザンツが、強力な外敵に対してどのように戦い、生き延びていったのかを、7～8世紀に2度にわたってコンスタンティノープルを包囲し、帝国を滅亡寸前に追い込んだイスラーム教徒アラブ人との戦争に焦点を絞って考察するものである。

1. イスラームの侵入とビザンツの抵抗——戦術書を手がかりに——

ユスティニアヌス1世の征服事業は短期間で破綻をきたし、その死後まもなく、広大な領土の各地に異民族が侵入してきた。7世紀の初頭には、帝国のもっとも重要な属州であったシリア・パレスティナ・エジプトもペルシャ人に奪われた。この危機にあって、ヘラクレイオス皇帝(在位610～41年)はみずから軍の先頭に立ち——378年のアドリアノープルでのワレンス皇帝の戦死以来、皇帝は戦場に出なくなった——、628年には遠くペルシャの都クテシフォンまで遠征した。ヘラクレイオスが都に戻って行なった凱旋式は、古代ローマ風の凱旋式の最後のものだったと思われる。同様に、ヘラクレイオスを最後にビザンツ皇帝は征服称号を帯びなくなる。戦うローマ皇帝、軍人皇帝から、平和の皇帝、ビザンツ皇帝への変化といえよう⁵。このような点を考慮に入れると、4世紀末のワレンス皇帝から7世紀初めのヘラクレイオス皇帝までの時代は、古代ローマから中世ビザンツへの過渡期といってよいだろう。このあと、ビザンツはビザンツ独特の戦争を展開してゆくことになる。

ペルシャを破った直後に、新たな敵、イスラーム教徒アラブ人が侵入してきた。ア

ラブ人のシリア侵入に対して、ヘラクレイオスは再び出陣したが、病のためシリアの都アンティオキアにとどまり、前線の指揮はふたりの将軍に委ねざるを得なかった。636年7月、ビザンツ軍はヤルムーク川でアラブ軍と真正面から衝突した。細かい経過は省略するが⁶、ビザンツ軍は、378年のアドリアノーブルの敗戦以来、できる限り避けるようにしていた正面戦争をあえて試みたのである。まずビザンツの左翼軍が敵の右翼に攻撃を仕掛け、続いて中央軍が川を渡って、アラブの主力軍と対峙し、真正面からの会戦を挑んだ。しかしながら、ふたりの将軍の不和、イスラーム信仰に燃えるアラブ兵の強さ、同盟軍の裏切り、砂漠の砂嵐といったさまざまな条件が重なって、最終的にビザンツの中央軍は完全に包囲され殲滅された。『テオファネス年代記』は4万の兵士が命を落としたと伝えており、イスラーム史家バラズリーによれば、ヘラクレイオスは「シリアよ、汝に平和あれ！なんと素晴らしい国を敵に渡すことか！」という言葉を残して、都へと逃げ戻ったという⁷。

ヤルムークの戦いからわずか5年で、シリア・パレスティナ・エジプトといったビザンツ帝国の重要な東方領は再び失われた。これらの地域はそれ以来、今日に至るまでアラブ世界である。636年のヤルムークの会戦は世界史を書き換える決定的な戦いであったことがわかる。

続いてビザンツは海上でもアラブ艦隊に屈服することになる。655年、小アジア南岸リュキア沖の海戦——アラブ側は「帆柱の戦い」と呼んでいる——で、伝統を誇るビザンツ艦隊は、創設までもないアラブ艦隊に惨敗を喫した。『テオファネス年代記』は次のように記している。

「……両軍が相まみえた時、ローマ人（＝ビザンツ人）は敗北し、海はローマ人の血で赤く染まった。そこで皇帝は自分の帝衣を別の男に着せた。……敵は帝衣をまもっていた男を殺した。……皇帝は戦場を逃れ、すべての者をあとに残してコンスタンティノーブルへと戻った。」⁸

陸海での大会戦に勝利したアラブ軍は、さらに進撃を続け、674年にはコンスタンティノーブルを包囲するに至った。アラブ艦隊は冬が来ても帰国せず、近くの基地で越冬して、春になると海上封鎖を再開するという作戦を、678年まで5年間繰り返した。存亡の瀬戸際に立たされたビザンツ帝国を救ったのが、ちょうどこの時に開発された「ギリシアの火」であったことはよく知られている。しかしながらアラブ軍は717年の夏に再度コンスタンティノーブルに迫ってきた。今回は陸軍も動員して、海と陸から丸1年間包囲を続けたのである。

717～18年のコンスタンティノーブル包囲のあと、国家の存亡がかかる首都決戦が行なわれることはなかった。領土的にも、シリアやエジプトの奪回はならなかったが、

小アジアは確保できた。しかしその小アジアにも毎年のようにイスラーム軍——750年に成立したアッバース朝以降はアラブではなくイスラームと表現する——の侵入が続いた。この時期のビザンツ帝国史の基本史料である『テオファネス年代記』は、3年に1度くらいの割合でイスラーム軍の侵入について記している。実際にはほぼ毎年のようにあったものと思われる。

イスラーム軍の小アジア侵攻はその後長く繰り返された。時にはビザンツ軍がイスラーム領に侵入することもあったが、基本的にはイスラーム軍の侵入、ただし領土獲得を目的としない、いわゆる略奪遠征が続いたのである。ようやく9世紀の後半から戦況は改善され、10世紀に入ると、ビザンツ軍が反撃に転じて、北シリア・上メソポタミアへと侵攻するようになる。

8～9世紀のビザンツは、イスラーム軍の略奪遠征に対してどのように対応したのであろうか。この問題に関してしばしば言及されるのが有名なテマ（軍管区）制度である。テマ制度の起源やその制度的発展については、中谷功治氏の一連の論文が現在でも基本文献である⁹。詳細は中谷論文に譲り、ここではテマ制度とは、アラブ人の侵入に対応して小アジアに敷かれた、ないし小アジアで成立した防衛体制であり、その軍団の主力となったのは農民から徴募された兵士であった、ということのみ指摘しておきたい。

本稿で検討したいのは、テマ制度のもとでビザンツがイスラーム軍とどのような戦争を行なったのかということである。この点については中谷論文も簡単にしか触れていない¹⁰。ビザンツの年代記にはイスラーム軍の侵入が繰り返し記されているものの、具体的にどのように戦ったのかは、年代記からはよくわからない。年代記の記事は、イスラーム軍がどこの地方や町を略奪した、住民を捕虜として連れ去った、とのみ記しているのが大部分だからである。恒常的に繰り返された戦いの様子を伝えているのは、「ストラテギコン Strategikon」ないし「タクティカ Taktika」と称される一連の戦術書である。ビザンツの戦術書を列挙したのが表1「戦術書一覧」である¹¹。

ビザンツ人の文芸活動全般に共通することであるが、戦術書もまた古代ギリシア・ローマの影響を強く受けている。古代の作品の模倣や引き写しも少なくない。900年頃の執筆とされるレオン6世（在位886～912年）の『戦術書 Taktika』以下、10世紀に多くの戦術書がまとめられたのも、この時期が「マケドニア朝ルネサンス」と呼ばれる古典の復興の時代だったことと無縁ではないと思われる。

しかしながら、ビザンツ帝国は常に敵と向かい合っていたから、戦術書も単なる教養書ではなく実用的性格を強く帯びることになった。ビザンツの戦術書が、戦争の実態をかなり忠実に反映していることは、古代には存在しなかった民族について論じて

表 1 戦術書一覧

執筆年代	著 者	書名(通称)	特 徴
4 世紀末 (?)	ウェゲティウス	Epitoma rei militaris	古代ローマの戦術書
6 世紀半ば	逸名	Strategikon	ユスティニアヌスの戦争
6 世紀末	マウリキウス皇帝 (?)	Strategikon	騎兵部隊重視
900年頃	レオン 6 世	Taktika	古典引用中心
950年頃	逸名	Sylloge Tacticorum	古典引用 + 同時代の戦争
950年頃	逸名	De Obsidione Toleranda	籠城戦
965年頃	ニケフォロス 2 世	Praecepta Militaria	対イスラーム遠征
975年頃 (?)	同上 (?)	De Velitatione Bellica	ゲリラ戦
970年~1000年	逸名	De Re Militari	対ブルガリア遠征
1000年頃	ニケフォロス・ウラノス	Taktika	総合的戦術書
1070年代	ケカウメノス	Strategikon	第 2 章のみ戦術書

いること、その時々政治や社会の問題に触れていること、さらには新しい武器への言及やアラビア語起源の軍事用語を用いていること、などからも窺える。文人皇帝レオン 6 世の『戦術書』のような、古い戦術書からの引用を中心にまとめている作品でさえも、後述のように、当時の実戦をある程度反映している。すなわち、10 世紀に戦術書が多数書かれたのは、対イスラーム戦争が一段落した段階で、それまで展開してきた作戦、そこから学んだ教訓や具体的な戦術をまとめた、という事情もあったと考えられるのである。とりわけ『籠城戦 De Obsidione Toleranda』¹² と『ゲリラ戦 De Velitatione Bellica』¹³ は、8～9 世紀に展開されていた対イスラーム戦争をふまえてまとめられた戦術書であった。

本稿では皇帝ニケフォロス 2 世フォーカス（在位 963～969 年）の名で伝わっている『ゲリラ戦』を手がかりに、8～9 世紀の対イスラーム戦争についてみてゆきたい。『ゲリラ戦』は序文において、同書に記されている戦術が、過去の、すなわちイスラーム軍の侵入が続いた時期のものであると断っている。かつ実戦に基づいてまとめられており、本文ではニケフォロスの一族をはじめとするビザンツの将軍はもちろん、イスラーム側の将軍についても固有名詞を挙げて、具体的な戦いに言及している。また、同時代の皇帝の政策にも触れている。たとえば 19 章では、兵士の自由が国防力の要だと説く際に、有力者が兵士の土地を奪い、兵士を自分の庇護民とすることを防ぐために、10 世紀マケドニア王朝の皇帝たちが法令を發布したことを指摘するのである。

『ゲリラ戦』の目次から対イスラーム戦争の概略を知ることができる。同書の章立ては、イスラーム軍の侵入に始まり、それに対してさまざまな対応をしつつ、最終的に国外へ撤退させるというビザンツの反撃作戦に沿っているようである。以下、その

内容を紹介することにしたい。

ヤルムークの敗戦後、病を抱えて都へ逃げ戻ったヘラクレイオスが真っ先に行なったのは、正確に言えば、アラブ軍に対してとることができた唯一の対応は、小アジアの南東部の国境山岳地帯を無人化することであった。ヘラクレイオスがその地の住民に退去命令を出した、とイスラーム側の記録は伝えている。これ以降の状況を、中谷氏は「小アジアから国境線が消滅していた」¹⁴と表現している。すなわち、イスラーム軍が小アジア南東のタウルス山脈を越えて侵入してきても、ビザンツ側はこれを国境で食い止めようとはせず、ビザンツ領を蹂躪するに任せた。国境で敵の侵入を食い止めようとするれば、ヤルムークの戦いのような正面戦争となり、軍の被害が大きくなるからであった。正面戦争では勝てないと判断したビザンツは侵入を放置することにしたのである。

国境の防衛線で敵の侵入を阻止することを断念したビザンツが、それに代わってとった対策は、イスラーム軍の侵入を素早く察知し、住民を要塞都市や山岳地帯に避難させることであった。『ゲリラ戦』の第1章、2章はそれを扱っている。ちなみに9世紀の半ばには、侵入路であったキリキア門（タウルス山脈の峠道）の北側にあるルーロン要塞からコンスタンティノープルまで、狼煙による緊急連絡システムが整備されていた¹⁵。

住民や家畜を要塞都市ないしは山岳の安全地帯に避難させたあと、ビザンツのテーマ軍はイスラーム軍に対するゲリラ戦を展開する。その詳細は6章以下の各章で記されている。すなわち、（1）一定の距離を保ちつつ敵軍を尾行し、敵が略奪などのために散開したところを襲う、（2）細い峠道を通過するのを待ち伏せして、両側の高みから不意打ちする、（3）戦闘部隊と補給部隊が分離したら、補給部隊を襲う、など各々の場合について具体的な戦術を示しつつ、以上のような作戦なら少数の軍でも勝てると『ゲリラ戦』は述べている。

要塞・都市にこもって耐えるのも重要な戦略であった。21章「要塞の包囲」は、敵の要塞を包囲するのではなく、敵に包囲された場合どのように対応するのか、食料の補給方法なども含めて記した章である。ビザンツ側が防衛戦に徹していたことの表れであろう。『ゲリラ戦』の少し前に書かれた『籠城戦』は、まさにそのような作戦について詳しく述べた戦術書であった。

『ゲリラ戦』20章では、ビザンツ領を席卷している敵が用心深く、上記のゲリラ戦術が有効でない場合、イスラーム領に侵入することで敵軍の撤退を促せと述べている。陽動作戦とはいえ、ビザンツ軍がイスラーム領に攻め込むという戦術であるが、恐らくこれは帝国の機動部隊が強化され、形勢がビザンツ側に傾きつつあった10世紀の状

況を反映したもので、8～9世紀の戦術としては例外と思われる。

23章では、撤退する敵軍を国境の山道で襲うことが述べられている。これがもっとも重要な戦術だったと思われる。敵は捕虜や戦利品を持っており、動きが鈍いうえ、長期の遠征で兵士は疲れているから戦果が上がる、捕虜や金品を奪回できる可能性が高いということであろう。侵入してきた敵にふれた第4章において、襲うのは帰り道にせよと述べていたが、その襲撃作戦の具体的戦術を述べたのが23章である。

このような戦略、すなわちゲリラ戦術は、古代の伝統に則った学問的著作という特徴をもつレオン6世の『戦術書』にも見られる。たとえば20章81節では、兵士のみならず一般住民も、弓を用いて山道や森でイスラーム軍を不意打ちする、という戦術が紹介されている¹⁶。各自が弓矢を準備し、射撃訓練をするよう、レオン6世は命じているのである。テーマ制度において、その軍団を構成していた兵士は、普段は農業をしていた農兵であったと述べたが、『戦術書』においてレオン6世が説いているのは、まさにそのような国民皆兵のゲリラ戦術に他ならなかった。

本章の考察をまとめておこう。10世紀の戦術書、ニケフォロス2世『ゲリラ戦』やレオン6世『戦術書』が語るのは、8～9世紀にビザンツがテーマ制度のもとで展開した戦術であった。ビザンツ軍はイスラーム軍との正面戦争を避け、ゲリラ戦に専念していた。その戦略は、できる限り被害を少なくして、イスラーム軍を撤退させるというものであった。戦術書は「こうすれば少数でも敵に勝てる」と述べているが、あえて言えば、勝つことを求めない戦争を展開したのである。

この戦略がどれほど効果的であったのか、判断は難しい。確かに毎年のようにイスラーム軍の略奪遠征は続いたし、9世紀になっても、たとえば838年には大規模な侵入があり、小アジアの中心都市アンカラやアモリオンが陥落するという深刻な事態も生じた。しかし、717年～18年の包囲以降は、アラブの大軍がコンスタンティノープルに迫るということはなくなった。ハールーン・アッラシード（在位786～809年）が行なった大規模な作戦も、ビザンツ帝国の存亡に関わるものとはならなかった。テーマ体制による防衛、ゲリラ戦術が一定の効果を挙げたことを示唆するものであろう。そのことは次章で述べるビザンツとイスラームのあいだで行なわれた捕虜交換からも証明できるように思われる。

2. ビザンツ＝イスラーム間の和平——捕虜交換 allagion——

8～9世紀における対イスラーム戦争について注目すべきは、このようなゲリラ戦術による防衛戦略が、平和ないし和解と組み合わせられていたことである。具体的に言えば、両者のあいだで捕虜交換のための休戦が定期的に成立したことである。ここに

も戦争に対するビザンツ人の考え方が現われているように思われるので、以下、捕虜交換について詳しく検討したい。

イスラーム歴史家タバリーの『予言者と諸王の歴史』756／7年の条には、次のような記事がみられる。

「この年、マンスールとビザンツの君主が捕虜の交換に合意した。それによってカリフはイスラーム教徒の捕虜を取り戻した。」¹⁷

イスラーム史家の太田敬子氏によれば、これがビザンツ＝イスラーム間の捕虜交換に関するイスラーム側の初出記事とのことである¹⁸。ほぼ同じ頃ビザンツ側でも捕虜交換に関する最初の記録が『テオフィネス年代記』768／9年の条に現われる¹⁹。いずれもきわめて簡単な記事であるが、ビザンツとイスラームのあいだで捕虜の交換が始まったことを伝えている。

それ以前、つまりウマイヤ朝時代に捕虜交換が行なわれていたかどうかは不明である。交換を窺わせる記録がないわけではないが、いずれも曖昧なもので、ほとんど行なわれなかったと考えるべきであろう²⁰。8世紀半ばは、それまでコンスタンティノープルの征服をめざしていたイスラーム教徒アラブ人が、ビザンツ帝国の存在を認めたくて、小アジアのビザンツ領に対する略奪遠征へと戦争形態を変化させた時期にあたる。捕虜交換の開始は戦争形態の変化、ビザンツとイスラームの共存を前提としていたように思われる。

8世紀半ばから始まった捕虜交換はその後繰り返し行なわれた。イスラーム側にはマスウディーの歴史書『タンビーフ』に記されている捕虜交換一覧のような記録があるが、ビザンツ側にはまとまった史料がなく、捕虜交換の全貌を把握するのは容易ではない。さしあたってまとめたのが表2「捕虜交換一覧」である²¹。この表から、ビザンツ＝イスラーム戦争の形態が変化した8世紀半ばからほぼ200年にわたって、繰り返し捕虜交換が行なわれたこと、また、次第に定例化していったことが窺える。ビザンツ側の記録では *allagion* という用語が定着してゆくことも、捕虜交換の制度化を語っているように思われる。

捕虜交換が具体的にどのように実施されたのか、その手続きや実態について、タバリーが詳しく紹介している845年の捕虜交換を例にとってみておこう。残念ながら、この捕虜交換についてビザンツ史料では、聖人伝にそれを窺わせる記事があるものの、年代記は伝えていない²²。

タバリーの記事は、ビザンツ皇帝ミカエル3世の使節がカリフのもとを訪れて、イスラーム教徒の捕虜を身請けするよう申し出たことから始まる。タバリーは記していないが、使節は、ビザンツ人の捕虜を返すよう合わせて申し出たのであろう。つまり

表2 捕虜交換一覧

年 代	ビザンツ皇帝	備 考
756／7年	コンスタンティノス5世	
768／9年	コンスタンティノス5世	『テオファネス年代記』
775－85年	?	(カリフ、マフディー時代)
797年	エイレーネー	
804／5年	ニケフォロス1世	
807／8年	ニケフォロス1世	皇太子スタウラキオスの妃候補釈放?
810年	ニケフォロス1世	
816年	レオン5世	
～837年	テオフィロス	ゲネシオス『歴史4巻』
845年	ミカエル3世	『聖ヨアニキオス伝』
855／6年	ミカエル3世	
860年	ミカエル3世	
861／2年	ミカエル3世	
867年	バシレイオス1世	
871／2年	バシレイオス1世	
896／7年	レオン6世	
903年	レオン6世	(実現せず)⇒905年
905年	レオン6世	
908年	レオン6世	『ロゴテース年代記』
916／7年	コンスタンティノス7世	『ロゴテース年代記』
925年	ロマノス1世	
938年	ロマノス1世	
942／3年	ロマノス1世	『続テオファネス年代記』他
946年	コンスタンティノス7世	『続テオファネス年代記』
950年	コンスタンティノス7世	(実現せず)⇒953年
953年	コンスタンティノス7世	(実現せず)⇒953年
953年	コンスタンティノス7世	ファーティマ朝との捕虜交換
954／5年	コンスタンティノス7世	『スキュリツェス年代記』(実現せず)
966年	ニケフォロス2世	サモサタ市にて実施
969年以降	ヨハネス1世?	ファーティマ朝との捕虜交換

捕虜交換の提案である。イスラーム史料によれば、845年に限らず捕虜交換はビザンツ側から申し入れていたようである。ビザンツの年代記には捕虜交換への言及は多くないが、やはりビザンツ側から申し入れたと伝えている。たとえば946年の捕虜交換について『続テオファネス年代記』は、コンスタンティノス7世が使節を送ったと述べている²³。ただ、946年の交換については、通常はビザンツの使節が来るところから始まるイスラーム側の記録が、それまでとは異なって、自分たちから交換を申し入

れたとなっており、どちらの提案なのか判断が難しい。とはいえ、全体としてはビザンツ側の主導で行なわれたことは間違いないと思われる。

ビザンツが捕虜交換に積極的であったことは、レオン6世の『戦術書』に捕虜に関する記事があることから窺える。それによると「戦争が完全に終結するまで捕虜——とくに敵のもとで名誉ある者や有力な者——を殺すな。……そして捕虜と交換に友人や同盟者を受け取るようにせよ。しかしもし敵が交換を望まないなら、……」²⁴とあり、ビザンツが戦争中から捕虜交換を意識していたこと、イスラーム側はさほど積極的ではなく、交換を断る場合もあったことが窺える。

ビザンツ使節が到着すると、交換の条件について交渉が始まる。交渉は必ずしも速やかに妥結したわけではなかったようで、実施に至らず決裂したこともあった（表2、網かけ）。とくに問題となったのは、交換される捕虜の人数・性別であった。交換は1対1を原則としたが、イスラーム側に捕虜となっていたビザンツ人は女性や子供が多かったのに対して、ビザンツ側がもっていたイスラーム捕虜は大部分が成人男子だったようである。このことは、当時の両国間の戦争形態からも首肯できよう。イスラーム軍がビザンツ領に侵入し、町や村を荒らして人質を取ったから、その捕虜は女性や子供が多くなる。ビザンツ軍がそれに対してゲリラ戦で抵抗したので、当然イスラーム兵士がビザンツ側の捕虜の大半を占めた。ビザンツ側はイスラーム兵士とビザンツの女性・子供との交換は1対1ではできないと主張したようである。

ビザンツが捕虜交換に積極的であったことに加えて、もうひとつ注目すべきは、ビザンツ側が多く捕虜を持っていたことである。イスラーム側は数を合わせるために、バグダッドで奴隷を買ったり、宮廷にいたビザンツ人奴隷を交換に使ったりした。捕虜の足りない分を金銭で補った場合もある。このことは、先に述べたビザンツのゲリラ戦術がかなり有効であったことを示している。確かに町や村が略奪され、住民が捕虜として連れ去られることはあったが、ゲリラ戦術によってイスラーム軍にかなりの打撃を与えていたことも確かであろう。

交換条件について合意が成立すると、双方が誓約を交わして休戦が成立する。捕虜交換は休戦を前提としていた。休戦については後述する。交換場所は小アジアの南東部セレウキア市の少し東を流れるラモス川であった。この川が両国の国境とみなされていたようである。川からさらに70キロ東方にイスラームの前線都市タルソス（タルスース）がある²⁵。10世紀の半ばにはビザンツが優勢となり、965年にはタルソスを攻略した。その結果、翌966年の交換は、ずっと東のサモサタの町で行なわれることになった。これをほぼ最後として、ビザンツ＝イスラーム間の捕虜交換は行なわれなくなるので、交換場所は200年間ほぼ一貫してラモス川だったと言ってよい。

タバリの845年の記事は交換の手續きについても詳しく記している。ただし、タバリは、誰によればこう伝えられている、誰々によればこうだ、といろいろな史料を引用しているので、事実を確定しがたいことも多い。たとえば、ラモス川において捕虜がどのように釈放され、自国に戻ったのかについて、ふたつの伝承を列挙している。ひとつは、兩岸からふたりの捕虜（ビザンツ人とイスラーム教徒）が同時に徒歩で涉り始め、川の中央ですれ違ったというもので、もうひとつは、双方が橋をかけてそれぞれ対岸へ渡した、というものである。

交換された捕虜の数についてもタバリは諸説を挙げているが、4460人という数字がもっとも信頼できるようである。4日間で交換を終えたと述べており、1日に千人以上が交換されたことになる。この数字が正しいとすれば橋を使ったのであろう。ただ、その他の事例を参照すると、7～8日かけて総数2千数百人が交換された、というのが平均的な数値であり、1日当たりの交換人数は300人程度ということになる。橋を架けたのならもっと多くの捕虜を交換できたはずだが、あえてゆっくりと時間をかけて交換をしたのではないか、というのが筆者の推定である。その根拠はやはりタバリの伝えるところにある。

タバリの交換記事は、カリフの名前だけではなく、ビザンツ皇帝の名前も挙げている。さらに、担当した役人の名前も記している。このことは交換が双方にとって重要な国家的行事であったことを示唆している。川を渡り終えたイスラーム教徒は「アラは偉大なり」と唱えた。ビザンツ人も似たようなことを言ったようである。また、896／7年の交換記事によれば、近隣の都市から住民が動員されており²⁶、当事者や軍隊が見守るだけでなく、一般の民衆にも公開されていたと思われる。これらのことを考慮に入れるならば、捕虜交換は儀式的性格を帯びていたと言って間違いあるまい。皇帝もカリフも、「自国民を捕囚から救い出す皇帝」「敵に対しても寛大なカリフ」というイメージを謳いあげる機会をとらえていたのである。そのためにも、丁寧に時間をかけてひとりずつ行なわれたのであろう。

捕虜交換に先立って結ばれた休戦条約は、交換が終了したあと40日間有効とされていた。いうまでもなく、その期間中にそれぞれが安全に故郷に戻るためである。845年の場合は、40日の休戦が終わると、たちまちイスラーム側が新たな略奪遠征に乗り出したようであるが、時には捕虜交換休戦がその後何年もわたって有効だったこともあった。そもそも捕虜交換を行なうために休戦が成立したのであり、捕虜交換制度はビザンツ＝イスラーム間の和平の象徴であったといってもよい²⁷。

ビザンツ側が優位に立つようになった10世紀半ばになると、捕虜交換は変質していった。942／3年の交換もビザンツ側から申し出たものであるが、イスラーム教徒捕虜

を釈放するから、エデッサの町にある聖遺物「エデッサの聖像」を引き渡せ、という提案であった²⁸。厳密な意味での捕虜交換とはいえない。何度か言及した946年の交換も、イスラーム側の史料によれば、大金を用意して2482名のイスラーム教徒を取り戻したが、それでもなお230人のイスラーム教徒が残ったので、地方有力者が私財で買い戻したと伝えられている。さらに、966年の捕虜交換はラモス川ではなく、ずっと東のサモサタ市で実施された。両国間の軍事的な関係が変わるとともに、捕虜交換は変質し、姿を消してゆくのである。

おわりに

紙幅も尽きたので、8世紀から9世紀にかけての対イスラーム戦争についてまとめ、ビザンツ人の戦争観についてひとことだけ述べて、結びに代えたい。

ジハードを掲げ、ビザンツ帝国、コンスタンティノープルを征服すべく遠征したイスラーム教徒アラブ人、8世紀初頭に至る100年足らずの間に、中央アジアから北アフリカ、スペインまで征服し、世界の歴史を書き換えた強力な軍団に対して、ビザンツ帝国はヤルムーク川の会戦をはじめ、何度か手痛い大敗北を喫しながらも、粘り強く戦い、生き延びていった。ササン朝ペルシャ帝国があっけなく滅ぼされたのと同期的である。

圧倒的な軍事力を持ち、ジハードを掲げるイスラーム軍に対して、ビザンツは勝とうとはしなかった。正面から戦うことは避けてゲリラ戦を展開し、なるべく被害を少なく、敵を撤退させる作戦をとったのである。かかる戦術の根底には、戦争はできる限り避けるべきだという考えがあった。そのような消極的反戦思想とも言うべき戦争観は、アドリアノープルの戦いをはじめとする敗北から生み出されたと思われる。すでに6世紀の逸名の戦術書も、「戦争が大きな悪、最大の悪であることを私はよく知っている」²⁹と述べている。しかし敵は攻めてくる、みずからを守るために戦わなければならない、だからこそこの戦術書を書いたのだとその著者は言う。

このような戦争観は、636年のヤルムーク川の大敗などによって、ビザンツ人の固定観念と言ってもよいものとなった。あいつぐ敗北の教訓から、ビザンツは戦争に勝とうと思わなくなった。まして敵を殲滅するのが戦争の目的だとは考えなかった。敵ともできる限り共存することを試みたのである。返した捕虜がまた攻めてくることは承知の上で、捕虜交換を制度化したところにもそれがよく現われているように思われる。

本稿で言及した一連の戦術書にもこのような戦争観を窺うことができる。レオン6世は『戦術書』の冒頭で「平和の皇帝」と名乗っている。続いて、人間は本来平和

的な存在であり、戦争は悪魔に取り憑かれた者が我々を襲うことによって起こるのである、そのような敵とは戦わなければならないが、野蛮人とはいえ平和に暮らしている者を攻撃するのは正しくない、と述べている。『ゲリラ戦』『籠城戦』の根底にあった考え方も同様である。ビザンツ人にとって、戦争は決して称揚すべきものではなかった。できる限り避けるべきもの、あえて言うなら必要悪であった。戦うことを高貴な行為とみなした西欧文明、ジハード聖戦を唱えたイスラームとの違いは明らかである。

ビザンツ人のこのような戦争観・戦術は、10世紀にビザンツ軍が強力となり、ブルガリアを併合するなど、対外侵略を進めた時代を経ても変わることはなかった。11世紀の末に十字軍を迎えた時にも、ビザンツはこの戦争観・戦術をもって十字軍の対イスラーム作戦に加わっている。イスラームに対して勇み立って向かう十字軍——そこにも聖戦思想を認めることができよう——は、煮え切らない態度に終始する同盟者ビザンツ人を「軟弱」「臆病」「卑怯」と罵り、ビザンツ人がたびたびイスラーム教徒と和睦し、時には手を結びさえるのを「裏切り」とみなした³⁰。しかしビザンツ人にとってそのような戦争観・戦術は、イスラームとの長い歴史のなかから生み出された、いわば生活の知恵だったのである。そしてその生活の知恵をひとつの命題にまで高めたのが、皇帝マヌエル2世の言葉に他ならない。帝国一千年の戦争史を凝縮したものともいふべき、その言葉を再掲して本稿を終えることにしたい。

「神は血を喜ばない。また理性に従わずに行動することは神の本性に反する。……理性を備えた魂を説得するために、腕力も、いかなる武器も、死をもって人を脅すその他の手段も必要ではない。」

（追記）本稿は第9回歴史家協会大会（2010年6月19日、於関西学院大学）での記念講演「ビザンツの戦争と戦術書」をもとにしている。紙幅の都合で講演の第1章を省略し、文献註を補った。

〈註〉

- 1 *Byzantine Warfare*, J. Haldon, ed., Ashgate, 2007. は1990年代に発表された論文を中心に25篇を収録している。
- 2 *Peace and War in Byzantium*, T. S. Miller, J. Nesbitt, eds., Washington D. C., 1995, p.2.
- 3 *Manuel II. Palaiologos: Dialoge mit einem "Perser"*, E. Trapp, ed., Wien, 1966, S. 79. 教皇の引用はカトリック中央協議会の訳による。

http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/feature/benedict_xvi/bene_message143.htm

- 4 *Ibid.*
- 5 古代ローマとビザンツの戦争観の相違については、井上浩一『ビザンツ 文明の継承と変容』京都大学学術出版会、2009年、第7章参照。
- 6 ヤルムークの戦いについては、J. Haldon, *The Byzantine Wars: Battles and Campaigns of the Byzantine Era*, Stroud and Charleston, 2001, pp.56-65. を参照。
- 7 *Theophanis Chronographia*, C. de Boor, ed., Leipzig, 1863, p.338; *The Origins of the Islamic State: Being a Translation from the Arabic, Accompanied with Annotations, Geographic and Historic Notes of the Kitāb futūḥ al-buldān of al-Imām abul 'Abbās, Aḥmad ibn-Jābir al-Balādhuri*, vol.1, P. K. Hitti, tr., New York, 1916, p.210.
- 8 *Theophanis Chronographia*, p.346.
- 9 中谷功治「テマ反乱とビザンツ帝国——『テマ＝システム』の展開」『西洋史学』144号、1986年、242－260ページ。同「テマからテマ制へ——テマ制度の成立時期をめぐって」『待兼山論叢』21号（史学）、1987年、28－50ページ。同「テマの発展——軍制から見たビザンティオン帝国」『古代文化』41巻2号、1989年、8－21ページ。
- 10 中谷「テマの発展」11－12ページ。
- 11 ビザンツ戦術書については、A. Dain, “Les stratégistes byzantins,” *Travaux et Mémoires*, 2 (1967), pp.317-392; H. Hunger, *Die Hochsprachliche Profane Literatur der Byzantiner*, II, München, 1978, S. 321-340; E. McGeer, “Military Texts,” *The Oxford Handbook of Byzantine Studies*, E. Jeffreys, ed., Oxford, 2008, pp.907-914. 参照。
- 12 D. F. Sullivan, “A Byzantine Instructional Manual on Siege Defense: The De obsidione toleranda,” *Byzantine Authors: Literary Activities and Preoccupations: Texts and Translations Dedicated to the Memory of Nicolas Oikonomides*, J. W. Nesbitt, ed., Leiden, 2003, pp.139-263.
- 13 *Three Byzantine Military Treatises, Corpus Fontium Historiae Byzantinae*, XXV, G. T. Dennis, ed., Washington D. C., 1985, pp.137-239; G. Dagron, H. Mihaescu, *Le traité sur la guérilla de l'empereur Nicéphore Phocas (963-969)*, Paris, 1986.
- 14 中谷「テマの発展」11ページ。
- 15 P. Pattenden, “The Byzantine Early Warning System,” *Byzantion*, 53 (1983), pp.258-299.
- 16 *Leonis VI Tactical, CFHB*, IL, G. Dennis, ed., Washington, D. C., 2010, pp.564-566.
- 17 *The History of al-Ṭabarī*, vol.28, J. D. McAuliffe, tr., Albany, N.Y., 1985, p.55.
- 18 太田敬子「ルーム遠征とカリフ政権——コンスタンティノーブル攻撃から捕虜交換式まで」『歴史学研究』794号、2004年、170ページ。
- 19 *Theophanis Chronographia*, p.444.
- 20 M. Campagnolo-Pothitou, “Les échanges de prisonniers entre Byzance et l'Islam aux IX^e et X^e siècles,” *Journal of Oriental and African Studies*, 7 (1995), pp.1-56. esp. pp.21-25.
- 21 A. Toynbee, *Constantine Porphyrogenetus and His World*, London, 1973, pp.390-93; 相野洋

- 三「ビザンツ―東方ムスリム間における捕虜交換について」『関学西洋史論集』21号、1998年、5－12ページ；Campagnolo-Pothitou, op. cit. をもとに補足を加えた。
- 22 *Tabari*, vol.34, J. L. Kraemer, tr., pp.38-44; A. A. Vasiliev, *Byzance et les Arabes*, vol.I, *La dynastie d'Amorium*, Brussel, 1935, pp.198-204.
- 23 *Theophanis continuatus*, I. Bekker, ed., Bonn, 1838, p.443.
- 24 *Leonis VI Tactica*, pp.348-350.
- 25 太田敬子『ジハードの町タルスース』刀水書房、2009年。
- 26 *Tabari*, vol.38, F. Rosenthal, tr., p.33.
- 27 ビザンツ史料も捕虜交換のあいだは休戦と伝えている。*Iosephi Genesii Regum Libri Quattuor*, CFHB, XIV, Berlin, 1978, p.44. 参照。
- 28 *Theophanis continuatus*, p.432; *Symeonis Magistri et Logothetae Chronicon*, CFHB, XXXIV-1, Berlin, 2006, p.338; Cf., K. Inoue, “The *Adventus* Ceremony of the Image of Edessa and Imperial Legitimacy,” *Orient*, 41 (2006), pp.21-40.
- 29 *Three Byzantine Military Treatises*, p.20.
- 30 この問題に関する最新の研究として、S. Neocleous, “Byzantine-Muslim Conspiracies against the Crusades: History and Myth,” *Journal of Medieval History*, 36-3 (2010), pp.253-274.